

群馬詩人クラブ

会報

No.288

編集／群馬詩人クラブ幹事会

代表／平野秀哉

発行／群馬詩人クラブ事務局

〒370-3102

高崎市箕郷町生原1730

龍昌寺

印刷 三協印刷

振替番号 00140-8-728969 狩野務

主な記事

- 裳 35年の軌跡 曾根ヨシ…… 2
- 群馬「翔べ翔べ暮鳥会」と暮鳥の関係 佐鳥吉美…… 3
- 新入会員紹介 長岡莊三…… 3
- イベント報告 …… 4~5
第28回 まほろばポエトリーステージ
金井裕美子
前橋ポエトリー・フェスティバル2014
新井隆人
- 詩集評 …… 6
樋口武二詩集『異譚集Ⅱ』 斎藤守弘
木村和夫詩集『青景色蛙御殿』 志村喜代子
- 受贈詩誌御礼 …… 7
- 現代詩作品展案内 …… 7
- 平成26年度総会・秋の詩祭案内 …… 8

「榛名まほろば」への感謝から 中澤陸士

現代詩資料館「榛名まほろば」のことは、当クラブの会員の方も含め、詩を書いている方なら、知らない人は少ないと思っ

ている。同館は、詩人の富沢智さんの個人経営のもと、1998年9月13日に開店した。以来、詩人達の語り合う場所として、貴重な詩集を閲覧できる場所として、著名詩人を招いて講演会や懇親会を行なう場所として、はたまた当クラブの幹事会の場所として、富沢さんはこの場所を提供してくださってきた。

そのような「榛名まほろば」は、しばしばマスコミにも取り上げられ、先日(2014年4月28日)も日本経済新聞に、富沢さんの農業との併走という意味で紹介されたばかりであった。

自分は、「榛名まほろば」にはよくおじゃ

まするし、詩のイベントの際には、だいたい、いつも受付を仰せつかったりしているので知っているのだが、普段もイベントの際にも欠かせないのが、実は富沢智さんの奥さんで、元国語の教師であった富澤礼子さんの存在である。礼子さんのことは、常連の方ならばご存じだと思いが、その経歴と現状に敬意を込めて、「礼子先生」と呼んでいる。

礼子先生が作る料理はおいしい。特に農業という生業をバックボーンにした野菜の献立は、サラダをはじめとして、煮物や焼き物、天ぷらに至るまで絶品である。礼子先生は、その料理でこれまでも、訪れる多くの詩人の方々をもてなしてくれた。無論、富沢智さんの料理の腕も忘れてはいけな

先生あつての手際の良さであった。

加えて、「榛名まほろば」での詩のイベントの際には礼子先生の書による立派な看板が出されるし、「榛名まほろば」から出版されている詩誌「榛名団」の表紙も、とみぞわまひろの名前でしばしば、礼子先生の写真が飾ってきた。そんな礼子先生のことと言うまでもなく富沢智さんも感謝している。しかし、「榛名まほろば」がマスコミに取り上げられる際にも、礼子先生のこととはまったく言っていないほど記されてこなかった。それについては、富沢智さんこそ、ご自分の口から御身の自慢めいたことなど言えなかったであろうし、このたびこの場をお借りして、礼子先生への感謝も含め、自分が伝えたいと思ったのだ。

しかし、決してこの場で、「榛名まほろば」という私的なお店の宣伝をするつもりはない。これは折に触れ、耳にすることかと思うが、「文学作品を創作することだけが文学活動ではない」という言葉がある。その意味で、礼子先生の存在は、まさに文学活動の一環だと思

う。詩人として名前が出なくとも、詩や詩人をこんなにもささえてくれているのはすでに立派な文学活動ではないだろうか。加えてそのような方々は、おそらく「榛名まほろば」に関わらず、あらゆるところにいらっしゃると思っ

裳 35年の軌跡

曾根ヨシ

「裳」一号は1979年6月10日あすなろ裳の会を発行所として、県内の女性12名で出版した。表紙は極めてシンプルで紫陽花色の表紙の上部に「裳」と一字活字で印刷され右下に1号 1979年 夏 とある。編集曾根ヨシ、季刊。新川和江、吉原幸子両氏の「ラ・メール」に先立つ事四年であった。編集後記には「どこかの国の女市長さんは家事の合間にお役所に出て行って市政を司る」という新聞記事を引用して私たちは家事の合間に詩を書くを重ねた。さて私たち詩を書く群馬の女性12人、どこを向いても女だらけ、男は一人もない詩誌「裳」を刊行する事にした。男には男にだけしかない生の感じ方や世界の感じ方があるように女には女にしかない生の感じ方や世界の感じ方がある。女の心の琴線にしか触れないことだってある。それを軽薄な現代のなかで失いたくない。そんな願いがこの詩誌に結集した。自分たちに必要な家は自分たちで作ろうという意気込みである。誌名の「裳」は時代を变迁して生き続ける女性の象徴であるスカートの意味で、つましやかな詩想を自由にはばたかせてみたいのが念願である。

出発に当って幸運だったのは二年前にメキシコ・スペインの留学から帰国して、本年度の現代詩女流賞を受賞した田村さと子さんが一年ほど前から前橋に在住している事を受賞

の新聞記事から知った事である。拙詩集「野の腕」を贈ると受賞詩集「イベリアの秋」が贈られて来た。大判の部厚い詩集を開くと歯切れのよい洗練された詩句が胸にしみた。早速「裳」にお誘いしてさわやかな一陣の風が吹き起った事を心から喜びたいと後記は結ばれている。

「裳」は季刊を守り発行ごとに合評会を重ねた。一番大切な事はいい詩を書くことそして掲載誌である「裳」を確実に発行する事であった。そのための合評会はかなりきびしいものであった。時には暗い気持ちで涙ぐんで帰宅したと言われたこともあった。しかしそのきびしい批評を聴きたくてもみな良く集った。「裳 第一号の目次」は次の通りである。

乳母車	田村さと子
腕	〃
恋歌	神保 武子
墮ちる	堤 美代
花	島田 千鶴
扉	福田 怜子
冬の公園	〃
病んでる蝶	中島 珠江
風が流れる	黒河 節子
配達	志村喜代子
命日の友	峰岸 和子
冬ざれ	真下 宏子
はるの指	杉 千絵
オルガン	曾根 ヨシ

編集後記

かなり長い間、合評会は公民館を借りて行われていた。市の公民館は駐車場が少なく遅くなれば遠い駐車場まで車を置きに行かねばならなかった。現在ではノイエス朝日さんの二階の会議室を借りて合評している。静かだし駐車場は広く会が終われば一階のギャラリイで展覧会が観られる。観終ればお茶を出して頂き作家とお話も出来る。ここでの時間は詩作の栄養になる。家庭から開放されて学べるからだ。

裳同人の殆どは長い間には県文学賞を受けている。県外の賞も、房内、真下の両人は受賞している。グループとしては「抒情文芸」や「詩と思想」で全国的に紹介された。編集は1号〜108号迄曾根が発送・雑務の全てを含めてして来た。109号から116号まで神保・志村の両人が編集を担当した。118号以降は主宰と相談しながらという条件付きで手書き原稿のパソコン打ちから編集までを須田さんが引き受けてくれている。表紙は31号から一貫して中林さんの版画で飾っているが一枚として同じ物は使わない。この6月30日裳は123号を発行したので中林さんの制作した裳の表紙の版画は92枚になった。自然界の生き物、野の花、山の花 少女達、題材は多彩である。一番若い四宮朋さんは去年上毛文学賞に輝いた。8月1日から24日まで中林三恵・めぐみの親子展が敷島町のフリッツアートセンターで開催された。裳同人の自作詩朗読、新井隆人氏引きいる「芽部」の活動仲間の演奏と朗読で多彩な朗読会となった。これからも続けたいと思う。

群馬「翔べ翔べ暮鳥会」と 暮鳥の關係

佐鳥 吉美

先日、五月二日、山村暮鳥の二女、土田千草さんが亡くなったので旧群馬町関係者で水戸の聖ステパノ教会での告別式に参列して来た。享年九十六才であった。

これで水戸教会への参列は四回目である。暮鳥夫人富士さん、昭和五十四年二月十八日参列、暮鳥長女玲子さん、暮鳥会水戸会長告別式などである。

一介の詩人もどきの私が、大正十三年(四十一才)で早世した山村暮鳥との接点は。

暮鳥は旧群馬郡棟高に生まれた。明治三十二年、十六才で堤ヶ岡小学校の臨時教員として教職につく。その時の生徒に小山茂市がいた。茂市はその後教職につく。大正四年「聖三稜玻璃」出版にあたっては「小生は今の文壇乃至思想のためにばくれつだんを製造している：略：此の詩集、今世紀にはあまりにも早き出現である：」と茂市に書簡を送っている。又暮鳥は小学校の同僚だった大沢平作に経済的援助の手紙などを送っているから茂市宛にもそんな事もあったのだろうか？

暮鳥死後茂市は暮鳥エッセイや暮鳥伝など文章を書いてきたが町関係の詩人を集めた「翔べ翔べ暮鳥会」を結成する。その内には茂市教職時代の女子校生徒だった砂長志げる

が居た。茂市は暮鳥詩を介して交友関係を深め砂長志げる宅に宿泊したりと八十才を越えた茂市に、実の娘も心配したとの話も聞くが詩人同志の交友であったのだろうか。

暮鳥会は昭和四十八年に発足、しかし「翔べ翔べ暮鳥」一号発刊ならずして茂市は死去、享年八十一才であった。

昭和五十年、水戸より暮鳥夫人土田富士さんが群馬へ来訪、講演、町文化祭参観、榛名町白岩の茂市の墓参、当時町に一軒あった宿に宿泊した。

五十一年、同人達は水戸や大洗を訪れた。大洗の暮鳥碑「ある時」を見学、その近くのホテルに宿泊、暮鳥夫人宅訪問、以後年に二度くらい、暮鳥墓碑、墓参、各地の詩碑除幕式に参列、福島県いわき市に建てられた「おうい雲よ」除幕式に参列したりした。

又、これ等が縁で大洗と群馬町は文化友好の町として、姉妹都市が誕生。小学生から一般の人々まで、文化祭の出版交流から行政役の関係者、経済人など交流が行われている。

「翔べ翔べ暮鳥」同人誌の発行は元より、暮鳥全集(筑摩書房)全四巻発刊に關係したり、群馬県教育委員会制作、暮鳥映画「深き淵より」に対してテレビ出演をしたり、「翔べ翔べ暮鳥」二十周年記念の詩集の発刊、生誕百年記念の写真集の出版等が行われて来た。

今年には暮鳥生誕百三十周年の行事も行われる予定になっていて準備が進んでいる。これからは暮鳥の孫や曾孫との交流を深めて行きたいと思っている。

新入会員紹介

絵筆をペンに持ち替えて

再出発

長岡 莊三

「生者必滅」の理を持ち出すまでもなく、近頃の私は老いをごく身近に実感しています。今まで、立ち止まって周囲を見回すゆとりもなくひたすら自分の人生を前進してきて、ふと気がつけば、我が人生も終盤にさしかかり、これから先は、ますます道は細く、けわしくなってきたことを悟らされる今日この頃です。さて、かく云う私は千曲川の水で産湯を使い、高校を卒業するまで故郷の信州佐久市で過ごし、縁あって群馬教育学部(美術専攻科)を卒業し、以来約三十五年間、中学校を主に美術教師として美術教育に携わって参りました。教職に従事する傍ら、自身の画業にも余力を注ぎ各種の美術展に出品し、個展も県内各地で数回開催し、中央の画壇にも籍をおきました。五十代半ばで退職後は本腰を入れて画業に専念し居住地、渋川市を美術活動の拠点として、渋川美術協会を創設し初代会長として、同時に近代日本美術協会という中央の美術団体で常任理事として会の運営にも参加し、邇来およそ二十五年は、今振り返って見ても、私の人生の集大成のような捻り多き充実した時代でした。いささか自慢話のようになってしまつて、恐縮ですがこのように紆

余曲折を経て、人生の旅路の果てに、今まで
は幸いなことに、あまり健康面では不安のな
かった私が喜寿を迎えた前後に、突然の大病
で入院し、併せて娘も大病に襲われてそれ以
降、体力、気力ともに衰えを実感しました。
この私の人生にとって最大のピンチを何とか
克服したのを契機に、今までの全力投球の生
き方を見直し、それぞれに今まで関与してき
た画壇の役職や仕事の第一線を引退し、過度
の負担のかからない自由な立場になって人生
の。仕切り直しを。図ろうと考えました。そ
して高校時代の文芸部員以来ずっと持ち続け
た文芸、特に詩、俳句の創作にこれからの人
生の活路を開きたいという思いに行き着きま
した。文芸の世界は私にとって決して無縁の
ものではなく、折があれば、詩や俳句、エッ
セイなど雑誌や新聞に投稿してきました。し
かし、今の私にとって文芸の世界は、ほんの
入口に立ったばかりの新人です。こんな私で
すが老骨に鞭打って人生のフィナーレにキラ
リと光芒を放つような仕事ができ、心ふるわ
すような出会いをひそかに願いつつ、新入り
のご挨拶に代えさせていただきます。

訃報のご連絡

本会の会員 窪田幸司さんが8月6日に
お亡くなりになりました。
謹んでご冥福をお祈りいたします。

イベント報告

第28回まほろばポエトリーステージ

木坂涼講演会「詩の食べ方」いろいろ

木坂さんが来た日のこと

金井裕美子

去る五月三日、榛名まほろばでポエトリー
ステージが開かれた。ゲストは木坂涼さん。
出迎えを頼まれ、三枝治さんと二人で高崎
駅改札口で、木坂さんをお待ちした。ゴール
デンウイーク真つ只中。東口付近では、子ど
もサービスでミニ蒸気機関車を走らせるイベ
ントで賑わっていた。もちろん、改札口も人々
の波。電車が到着するたびにザンブと人々
の大波がくるので、うまく会えるかしら？と
出迎えの二人は緊張し通しだった。無事に木
坂さんを発見でき、その笑顔に出会えたとき
は嬉しかった。そして、一路まほろばへ。

まほろばポエトリーステージは、ゲストと
聴く人たちの距離が近い。それは大きな魅
力だ。今、この時この人と同じ場所に居る。
その嬉しさを身に感じられるのがいい。

本日、満席。隣の練習場からサッカー少年
たちの歓声が響いてくるのも、薫風が白い
カーテンをふわりとゆらすのも、木坂さんの
まるみのある声質と飾らない人柄、やわらか
な表情や仕事とよく似合って、心地良かった。
木坂さんは一九五八年生まれ（私より一つ

下）。詩集『ツツツツ』で現代詩花椿賞を
受賞されている。「詩学」の投稿欄の選者を

務めていらしたこともあり、詩人として有名
なのがご存知の通り。絵本作家、翻訳家とし
ても人気があって、活躍中。また、〈余白句念
のマドンナの存在でもあるとのこと。

ご自身の生い立ちからはじまり、内気だっ
た少女期のこと、ニューヨークに行った頃の
こと、詩作の方法など言葉を選びながらもよ
どみなく「詩の食べ方」いろいろを語られた。
愛らしいゆつたりとした口調で朗読もまじえ
て。ああ、天性の詩人っているんだなあ、と
見惚れながら、あらためて、詩を楽しいと思っ
た。日頃、せわしく暮らしていてカチンコ
チンにこつていた心がほぐれた気がした。

夫アーサー・ビナード氏と共訳のアメリカ
カ子ども詩集『ガラガラヘビの味』（岩波少年
文庫）の裏側。よく訳せたと思った文をアー
サーさんの部屋へ届けておくと、削られたり
加えられたりして戻ってきたなど、共訳なら
ではの難しさも垣間見られて、面白かった。

おしまいにエッセイ集『ペランダの博物誌』
から、ノーベル賞を受賞したポーランドの詩
人、シンボルスカの「詩の好きな人もいる」
を朗読。（前略）詩が好きと言っても――

／詩とはいったい何だろう／その問いに対し
て出されてきた／答えはもう一つや二つでは
ない／でもわたしは分からないし、分からな
いことにつかまっている／分からないことが
命綱であるかのように

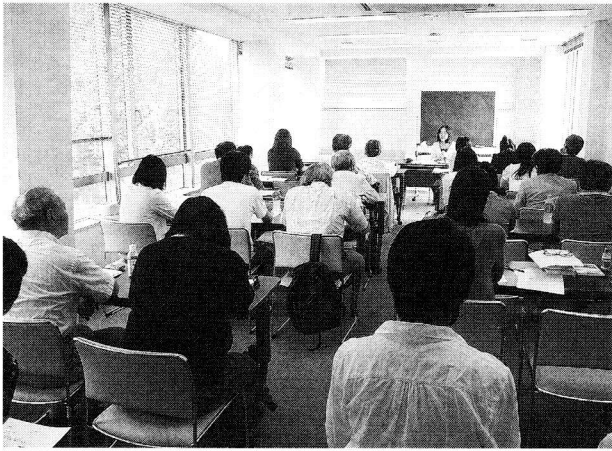
詩の好きな人は少数派かもしれないが、命
綱につかまって、ここ、まほろばで、詩の好
きな人たちと共に過ごせた一日を幸いに思う。

詩人の立ち位置

前橋ポエトリ・フェスティバル二〇一四を振り返って

新井隆人

今年五月に開催した標記のフェスは、開催期間十六日間、開催場所六会場、展示・イベント総数十五、出展者・出演者約六十名という規模だった。主催は、ほくが代表を務める団体「芽部」で、前橋文学館を会場とする展示・イベントに関しては前橋文学館が共催したほか、思潮社、土曜美術社出版販売の後援



マエバシ詩学校「詩はどこにある？」 撮影：新井隆人

を得た。展示やイベントを個々に紹介するのは、残念ながら誌面が不足している、ここではコンセプトや趣旨に絞って述べることにする。公式ホームページも立ち上げたほか、「商工まえばし」七月号ではインタビュー、「詩と思想」九月号ではレポを掲載したので、詳細はそちらをご覧ください。なお、前橋文学館で開催したマエバシ詩学校（テーマ「詩はどこにある？」）は、全五コマの講義録を「詩と思想」八月号から連載している。また、TH（トリーキングヘッズ）叢書五九号でも「ダンス・のがある」のレビューを掲載している、併せてご覧いただきたい。

本題に入る。詩のフェスティバルはどこでも開催できるものではなく、風土や歴史といった裏づけが必要となる。その点、前橋は、全国でも限られた詩のフェスが説得力を持ち成立し得る土地であるといえる。その理由は言うまでもないが、萩原朔太郎や萩原恭次郎等、日本を代表する近代詩人を輩出し、市のキャッチフレーズを「水と緑と詩のまち」としており、前橋文学館を有するなど、詩にゆかりの深いまちだからである。しかし、現状はどうかという点、残念ながら詩は厳しく寂しい状況にあり、先行きの見通しも芳しくない。そこで、前橋における詩の復興を願い、フェスティバル開催を思い立った。幸いにして、アーツ前橋効果で街なかに集い出したクリエイターたちと知り合うことができた。詩人だけでは無理であっても、多くのクリエイ

ターの力を借りれば開催できる。それは結果として、詩を題材としながらも、詩の枠組みを拡大し、詩を幅広い人たちに



詩と音楽のオープンマイク 撮影：竹沢佳紀

にアピールできるフェスとなった。詩に興味がない人や、興味はあるが躊躇している人が、フェスをきっかけに詩をより身近に感じてもらえたらいいな、と想っていたが、その思惑はある程度達成できたという感触を得ている。実は、群馬詩人クラブと共催したいという思いもあった。だが、ほくが幹事を務めていた前期の幹事会には、詩人クラブを外に留めて開こうという意志がなかった。「詩人クラブは親睦団体で、会費は会員向けに使うべき。外部に向けたイベントをやりたいならクラブでなくて自分でやればいい」というのが当時の幹事会の主たる意見だった。……群馬詩人クラブの立ち位置はどうあるべきか。親睦団体で事足りるのか。そして詩人の立ち位置は、ほくの出した結論がこのフェスなのだ。

樋口武二詩集『異譚集Ⅱ』の理性

—その「像」と「意味」の領域—

斎藤守弘

道端で箱を折っている人に、何をしているかを問う。行為に意味は存在するが、意味づけができない。しかし人は無意味でありながら確実に世界の一部を担う。その無意味こそ無限の心であり、失われた「私自身」である。(作品「箱を折る」より)

このように、主格が二者で自我が一という肖像の方法を使い、さらに裁断の対象となるような三人称を追い払う。そして自我の触手を肖像の領域と意味の領域に伸長をし、言葉の意味作用を劇化することができる、そのような詩集である。

詩集には主に三つの理性があると思う。一つは実在の無意味と言葉の意味の認識が正確であること、二は、したがって実在という呪縛から解放する過程を詩にしていること。三は、表現体の今日性と文学観の、高い氣息。

樋口武二詩集『異譚集Ⅰ』では、像の詩劇であった。同著Ⅱではその像に加えて意味の劇化をする。これは変容ではなくて言葉の極地にみえる同一の地表と領域を見る知悉の上に立つ著者の軸の長さを語ることになる。作品はすべて実在の意味の自我を消滅したうえで言葉の直中の意味、言い換えると実在の自我の無意味であるので、私たちは劇中の照明を絶やして劇を観るようだ。作品「鬼

灯奇譚」の老婆と子供や、「狐の嫁入り」の光のとどかない遠方の意味の行為を見る行い、それが席という行為の意味なのであった。ここでは実と虚とを切る幕はいらす、正確な恣意性の通りみちの末の、恣意性が社会性を内包する地点のありかを気づかされるのだ。

「昨日あたりから 何となく身体の調子が おかしかった / どうしようかとおもっていたら、 / 今朝になって、いきなり背中から 薄い紙のような羽が生えてきたのである」

—作品「羽について」より
—ある朝、グレゴール・サムザがなにか胸騒ぎのする夢からさめると、ベッドのなかの自分が一匹のばかでない毒虫に変わってしまったているのに気がついた。

—フランツ・カフカ著『変身』より
カフカの中編小説『変身』については、神学、精神分析学、そして唯物史観の階級論の考察など多様にあるときく。いま『異譚集Ⅱ』の読後感とカフカ観を合わせて考えると、執拗に引きずっている言語体・文体観からも解放し、言語道具観を一蹴する使命としてある表現体の今日性と創意のみちた詩集の意味を痛感するのである。

青年サムザは意味の領域にて無惨な死をむかえる。しかし「羽について」にて、白い羽は夢の底でひとすじの希望の領域でせわしく動くのである。「…わからなくなった、と告げて 自死したGの『見える』といった現象はあるいは独白」より、自死したGの領域は死と希望との狭間にとり詩劇であった。

木村和夫詩集『青景色蛙御殿』

自在に、「青景色」

志村喜代子

萩原朔太郎の「青猫」を読んで、安易にタイトルをつけてきたことを恥ずかしいと思いましたが、と、あとがきに著者は書いています。まさしくタイトルへの入念な対峙は、全六十四作品を清々しいまでに牽引しています。また、「19F07」のように、詩を作ったときの「日付」数字・「月」を表す英字の頭文字・「年号」(西暦下二桁)数字。この方法でつけたタイトルならば、私のイメージ通りに作品の解釈してもらえそうとも書いています。熟慮の末に、作品のイメージを壊さないため、この方法であると。この日という日の存在枠は、個に徹し得るゆえの心やさしい拒否であって自在ささえ感じさせられません。書くものと書かれるものとの宙吊り(言葉の不条理)を、身に引き受けていくことは並大抵ではありませんが。

ただうっそうと緑が厚い
ただうっそうと緑が厚い
これがこの時季の田舎の身体だ
行き交うものもなく
静まり返った田舎路を
ひとり歩いてみると
太陽の光を
十分に浴びた

大勢の葉のささやきが
わたしの皮膚を透って

ひとつひとつの細胞を震わせていた

この感触をえて わたしは

生きていくことの意義を実感し

この歓喜を わたしのなかの風景に

しっかりと刻んだ

そして生きることが これほど濃く

厚い緑だとはおもわなかった

著者からほとばしり出る詩集全編を貫く

「青」、そして表紙の緑は生命の色です。青

猫の青は氏の身体を流れる血液の色だ。と

おっしゃるように。この作品では(ただうっ

そうと緑が厚い)田舎路であって、他の描写

を待ちません。(これがこの時季の田舎の身

体だ)と。自然との一体化の中で緑あふれる

風景を、(田舎の身体だ)と。緑なす木々や

草々を(大勢の葉)とも。それらのささやき

が(わたしの皮膚を透って)ひとつひとつの

細胞を震わせていた)と、厚い万緑の気を細

胞内に取り込んでしまう。そして(生きてい

ることの意義を実感)するまでに高揚するの

です。然り「歓喜」であり、(生きてい

ることが、これほど濃く/厚い緑だとはおもわ

なかった)に至るのです。詩作品のひとつと

つにこの(厚い緑)は描かれているのですが、

(濃く)かつ著者の(厚い)緑にどこまで

肉体化でき、(生きること)を知覚できるか

と自分に問う時、足元が揺らぎます。

何度も描出される「天然」への慈しみと祈

り、「田んぼ」に「蛙御殿」の細い稲苗の緑
が分蘖を重ね、穂孕み(米という果実を実ら
せる)、いのちの「青景色」を宮沢賢治のエ
スプリと朔太郎の青い血液で、自在にさらに
自在に染め上げて――。

受贈誌誌御礼

*御惠贈感謝いたします。

鳥根県詩人連合会会報76

大分県詩人協会会報140

福井県詩人懇話会会報85

裸心版2014・6・10

山形県詩人会会報26

福島県現代詩集

中日詩人会会報180

とつとり詩人30

季刊誌誌の現代9

エミリー・ディキンソン私論

ガラスの肖像

樋口武二

房内はるみ

関口将夫

ぎぎ5

裳123

栃木県現代詩年鑑2014

平成26年版

岡山県詩人協会だより13

宮城県詩人会会報19

兵庫県現代詩協会会報35

関西詩人協会会報74

日本詩人クラブ広報67

岐阜県詩人会会報35

福岡県詩人会会報159

名古屋よえ詩集

新日本現代詩文庫116

前橋文学館報40

中国詩人会ニューズレター36

戦争放棄

埼玉詩人会会報75

斉藤守弘

(八月三十一日現在 敬称略)

第二十二回

群馬詩人クラブ現代詩作品展

テーマは特にありません

会場 水と緑と詩のまち 前橋文学館 (三階)

会期 10月5日(日)～19日(日)

9:30～17:00まで
水曜休館 最終日は13時まで

参加費 五百円 お一人何点でも可

引き続き、参加者を募集中です。

参加希望者は、幹事までご連絡ください。

*立体作品の展示台が少ないので持参できる方

はよろしくお願いいたします。

搬入 10月4日(土) 9時～14時

搬出 10月19日(日) 13時～15時

10月20日も搬出可能

右記に搬入できない方は、搬入を他の会員

に依頼されるか、10月3日の19時まで「様

名まほろば」へ作品をご持参ください。また

搬出の際、ご都合がつかない方の作品は、一

時的に「様名まほろば」で預かっていただけ

るということですが、その場合、保管は10月

朗読会 10月11日(土) 14時～17時

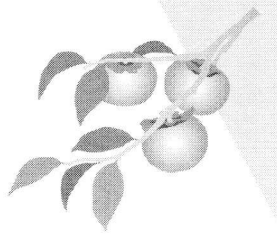
懇親会 10月11日(土) 17時30分～

懇親会参加費は四千五百円(ドリンクフリー)、

場所は文学館向い一階「身土不二」(シンドフリ)。

心るってご参加ください。

平成二十六年 総会及び 秋の詩祭の お知らせ



平成二十六年年度総会及び秋の詩祭を左記のとおり開催いたします。
会員の皆様方、万障お繰り合わせのうえご参加くださいますようお願いいたします。

期 日 平成二十六年十一月二十三日
(勤労感謝の日)
場 所 前橋テルサ4階 第3研修室
受付開始 午後1時30分
総 会 午後2時～2時30分
秋の詩祭 午後2時40分
講師 三浦雅士氏
演題 「今 詩は」(仮題)
懇親会 午後4時
会場 前橋テルサ1階
オルビエターナ
会費 四〇〇〇円

〈秋の詩祭・講師紹介〉

三浦雅士氏

略歴

- 一九四六年 二月弘前市生まれ。
- 文芸評論家、日本芸術院会員。
- 一九七二年「ユリイカ」編集長。
- 一九七五年「現代思想」編集長。
- 一九八四年「メランコリーの水脈」でサントリー学芸賞受賞。
- 一九九一年「ダンスマガジン」編集長。
- 一九九六年「身体の零度」で読売文学賞受賞。
- 二〇〇二年「青春の終焉」で伊藤整文学賞、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。
- 二〇一〇年 紫綬褒章受章。
- 二〇一二年「出生の秘密」その他の業績で日本芸術院賞・恩賜賞受賞。
- 萩原朔太郎研究会会長。



編集後記

探し物をしていて、目当ての物とは全く別の物を見つけてしまい、思わず時間と意識をそちらにとられてしまう・・・というようなことはありませんか？ 私はよくあります。先日も学生時代の物と思しきノートが見つかってしまい、おお、これは！とページを繰ると後ろの方に詩が書いてある。それは室生犀星の「靴下」という詩を書き写したものでした。

なぜ。こんなところに室生犀星。いくら考えても思い出せないのですが、読み返してみるとやはり胸を打たれます。

靴下 室生犀星

毛糸にて編める靴下をよはかせ／好めるおもちゃをも入れ／あみがさ、わらぢのたぐいをもおさめ／石をもてひつぎを打ち／かくて野に出でゆかしめぬ。／おのれ父たるゆゑに／野辺の送りをすべきものにあらずと／われひとり留まり／庭などをながめあるほどに／耐えがたくなり／煙草を噛みしめて泣きけり。
ン十年前も今も、難しいことが書いてあるとワカラナイ。こんな風に心にすんと落ちる詩が、自分は好きなのだと思った猛暑日の午後でした。

九月も半ば、夏の疲れが出る頃かと思えます。皆様どうぞご自愛のほどお過ごし下さいますように。

(泉)